谷恒生
雪姫
巨悪を斬る

雪姫 巨悪を斬る

一九九〇年三月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者—谷 恒生 © 1990 KOSEI TANI Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二—〇〇一 電話東京(〇三)—九四五—一一一(大代表)

印刷所—信毎書籍印刷株式会社 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第三出版部あてにお願い致します。

雪姫　巨悪を斬る

恒生

講談社ノベルス
ODANSHA NOVELS

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーイラストレーション＝熊崎　勝
本文イラストレーション＝文月　信

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

目次

第一章　浜町河岸の死美人――7
第二章　謎のゆくえ――48
第三章　大花会――101
第四章　疑惑の影――137
第五章　巨悪への挑戦――178

第一章　浜町河岸の死美人

1

天明五年正月五日夜明け。

眠りから覚めない大江戸八百八町に小雪がちらちら舞っていた。

夜明けの青白い光が、雪化粧された浜町河岸をもうろうと映しだす。

浜町河岸には、骨のきしむほどの寒さをふきとばす威勢のいいせり声がとび交っている。

印ばんてんに褌だけの若い衆たちが、黒山になって、河岸にあがったばかりの魚をせっている。

鯛や鰤、鮪、ひらめ、などの大魚からあんこう、河豚、ほうぼう、かわはぎといった鍋物の具、海老、なまこ、このしろ、さより、タコにイカ、穴子、シャコ、赤貝、アワビ、サザエその他、江戸湾で獲れたおびただしい魚貝類がトロ箱につめられ、次々にせり落されていく。

「すごい活気ね、なんだか昂奮してきちゃう」

せり台を十重二十重にとりかこみながら、眼を三角にして符牒のせり値を叫んでいる群衆のうしろで、雪が瞳をかがやかせた。

「魚屋も、料理屋の板前も、せりが命でございますからね。どいつもこいつも、真剣勝負のつばぜり合いでさ。お嬢さま、ご用心ください、へたすると突きとばされちまいますぜ」

弥七がにが味ばしった顔にからかうような笑みを浮かべた。

日本橋南町に大店をかまえている江戸屈指の呉服

商、吉蝶の三男坊である。居候をしている雪に、魚河岸の初ぜりをみてみたいの、連れていってよ、とせがまれ、眠い眼をこすりながらしぶしぶでかけてきたのだ。

江戸時代、浜町河岸の高級魚のほとんどは、江戸城、その周辺に軒をならべる料亭、それに、山の手の旗本屋敷や三百諸侯の屋敷にはこばれてしまい、江戸庶民の口には滅多にはいらない。

江戸城には、現在の霞が関の諸省庁がすべて集められている。勤務する役人のかずも二万人にのぼり、女房、腰元、茶坊主、小者などを入れると、途方もない人数になる。さらに、三百諸侯とその家臣、出入りの御用商人や将軍私邸である大奥の使用人が加わり、昼食時には江戸城周辺の食事処はたいへんなにぎわいとなる。

小者たちは弁当をもってくるし、役人の中にも奥方の手づくり弁当持参の者がかなりいる。が、大半は外食である。それは江戸時代も、いまも、それほど変らない。

役人といっても幕閣中枢を担う老中、大目付、若年寄や外様大藩、雄藩の諸侯のいきつけの店、高級官僚がひいきにしている店、一般役人の食事をする店、諸藩家臣たちの店、小者たちのいく店などさまざまに分かれている。

なにはともあれ、江戸城という官庁街の周辺にはありとあらゆる食べもの屋がひしめき、現在と匹敵するぐらい、外食産業花ざかりであった。

旗本屋敷や諸藩江戸屋敷には、それぞれに出入りの魚商人がいて、前夜に台所をあずかる奥女中や台所役人に御用をうかがい、河岸で仕入れるのである。

ボテ振りの魚屋は下町に密集する路地裏長屋をまわってあるくだけであった。とてもではないが、旗本屋敷のたちならぶ山の手に足を踏みこめるもので

はない。
江戸は武士階級の住む山の手と労働人口の密集する下町と、完全に二分されていたのだった。
雪はあちこちのせり台や河岸に軒を連ねる卸の店先をのぞきこんでいる。睫毛の長い二重まぶたの愛くるしい瞳に、好奇心がきらめいている。
そんな雪を、弥七は困ったようすで眺めている。内心はらはらしているのだ。このきまぐれで、無鉄砲で、おてんばで、好奇心のかたまりのお姫さまに怪我でもされたら、それこそ、死んでおわびしなければならない。
(まいったな、お屋敷に帰ってくださらないうちは吉原がよいもできやしねえ)
弥七はうんざりしたように顔をしかめた。雪は弥七の迷惑などかえりみるはずもなく、ウマヅラのひたいを人差指でつっついたり、ほっぺたをふくらませてトラフグとにらめっこしたりしながら、きゃっきゃっと嬉しがっている。
(寒い、からだの芯から冷えこんできやがる)
弥七は背筋をぶるっと震わせると、小雪の舞い散る漠たる虚空をうらめしげにあおぎ見た。
突如、浜のほうで絶叫があがった。
弥七の眼もとに険がはった。雪が野次馬と一緒に声のあがった方向めがけて一散に走っていく。
浜町河岸は、大川が江戸湾に流れこむ三角洲に位置していて、品川や浦安、稲毛、葉山、逗子、木更津など江戸近郊の漁村の船が、いくつも海に張りだした桟橋に鈴なりに係留されている。
桟橋の先端に繋いである漁船のともで、初老の漁師が腰をぬかしながら海を指差している。
鉛色のどんよりした海面に雪がふり散り、浜町河岸から眺める海の景色はなんとも荒涼としている。
ゆるくうねる海面に、藻のようなものがゆらめいていた。よくみると、乱れた黒髪であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「土左衛門でがす。だれか、ひきあげてくだせえ」
初老の漁師が唇をわななかして叫んだ。
岸辺にむらがった野次馬たちの視線が一斉に向く。
女はうつ伏せになってうねりにもまれている。唐綾の五色織りの衣装が、鋼色の海中に透けて、妖しい幻想美をかもしだしていた。
河岸の若い衆が舟艇のもやいを解いて海に漕ぎだし、一人が長柄の手鉤をつかって女の水死体をたぐり寄せ、二人がかりで舟艇にひきあげた。
雪は一番前で瞳を凝らしている。真剣な表情だ。目鼻の冴えた美しい鋭角的な美貌に、ある種の切迫感がこもっていた。
「心中の片割れらしいぜ、見な、右手首に紅紐がくくりつけてあるだろう」
河岸の若い衆が死人を肩にかついで岸辺に移した。
「だれか番所に知らせてこい、チェ、初荷のせりだってのに、縁起でもねえ」
雪が野次馬の中からおどりだし、水死体の前にかがみこんだ。はだけた衣装からのぞく肌が蠟細工のようだ。下腹がかなり膨れている。ずいぶん海水をのんだのだろう。
凄ざまじい形相がほそおもての顔に凍りついていた。みひらいた瞳に、憎悪か怨みか、鬼気せまる表情がある。
「お嬢さん、近づくんじゃねえ」
若い衆が雪の肩を乱暴につかんだ。
「やめな」
すかさず、弥七が若い衆の腕をとらえて力まかせにひきもどした。
「なにをしやがる、この唐変木」
若い衆がいきりたってわめいた。
「いいから、目をつぶっててくんな。おまえさんに

は迷惑かけやしねえよ」
といって、弥七はすばやく若い衆に小粒をにぎらせた。
「こ、こんなに」
若い衆が眼を丸くする。
「お役人がきなさるまでさ、たのむぜ」
弥七がいなせな微笑をかえした。
ほどなく、近くの番所に詰めていた同心が小者を連れておっとり刀でかけつけてきた。
すぐさま、縄張りが張られ、立入禁止となる。
「お嬢さま、なにかわかりましたかい」
弥七が笑いかけた。
雪は答えず、けわしい面持で死体をみすえている。ややあって、当惑したようにつぶやいた。
「あの方、手の指に琴ダコがあったわ。そして、背筋がピンとして姿勢がいい……」
大川の河口に雪が舞う。
沖合いからうつろに海鳴りがひびいてくる。どうやら今日は大暴風になりそうだ。

昼すぎ、吉蝶の裏木戸をあけて、今様の鹿子縞の着物に茶のつむぎをはおった粋な人物が番傘をさしてのっそり入ってきた。
異端、博識の文化人、大田蜀山人である。
雪は広縁で庭の雪景色をぼんやり眺めていた。張りのある美しい瞳が茫乎とかすみ、能面のように表情がない。
大田蜀山人は女竹の粗垣沿いにまわり、しおり戸をくぐって広縁にすたすたと近づいてきた。
「嬢さま、今朝は浜町河岸で死美人とお会いなされたそうですな」
のんびり声をかけ、にこりと笑い、懐手のまま手入れのゆきとどいた口髭を意味ありげにしごいた。

「蜀山人先生」
雪は破顔し、それから、頬をかんだようにへこませた。
「取調べに当たった同心が吉原通いの仲間でしてな。山咲新十郎と申して、のみこみがはやく、正義感も強い。八丁堀きっての凄腕といっては、ちと誉めすぎかな」
蜀山人はいくらかつきでた腹をゆすって笑い、すぼめた番傘をさかさにふって雪をはらい落とすと、広縁にどっかり腰を下ろした。
「山咲新十郎のはなしによると、女は年のころ二十二、三、衣装の袖にこぶし大の石が五個ずつ入っていたという。身もと割出に役立ちそうな遺留品は一切なしだそうだ。死後どれほどたっているかは不明だが、衣装や躰の様子から判断して、それほど刻は経ておらぬと申しておりましたぞ」
「肌衣はいかなる色でございました」
雪がいった。
「萌黄綸子の長襦袢に、同色の湯文字だそうでござる」
「おもしろくありませんわ」
雪が眉をひそめた。
「心中するのに萌黄色とは、いささか不心得でございましょう」
「嬢さまは、心中者の肌衣は純白でなければいかぬとおっしゃられるか。いや、けっこう、けっこう」
蜀山人が膝をたたいて笑った。
雪は憮然とした表情だ。
「嬢さまのような由緒ただしき名門の姫君にはかかわりないでありましょう。されど、田沼意次公が御政道をつかさどる当節、この大江戸において、頽廃的官能的享楽思想が蔓延いたし、町家の娘はもちろんのこと、お旗本の姫君、お武家のお嬢さまでもが吉原の人気花魁の髪の結いぶり、装飾、衣服、持

物から襦袢、湯文字といった肌衣にいたるまで、これを模倣するしまつにござる。肌衣も年ごとに煽情的になり、濃紫、紫、淡紫、黒、秋桜色、薔薇色、藤色、萌黄色、鶯色とあらゆる彩色がとりそろえてあり、肌衣を専門にあつかう商人までではじめた昨今でござるぞ。萌黄色の長襦袢や湯文字など、むしろ、おとなしいほうでござろう」

「それは、わたくしも承知いたしておりますわ。蜀山人先生や山東京伝先生の絵草紙を読ませていただいておりますゆえ」

雪が皮肉な調子でいった。

「けれど、あの方がはたして、萌黄色の肌衣をつけて心中いたしましょうか。それに、あのお顔、無念をのんだ表情でしたわ。とても覚悟の心中とはおもわれませぬ」

と、こめかみに人差指をあてがって顔をうつむけた。

「嬢さまは、浜町河岸にただよっていた死美人は、心中ではないとおっしゃりたいのですな」

蜀山人が眼のふちに小さな笑いじわをきざんだ。

「たしかに右手首の紅紐と袖に入れた小石だけでは、心中と断定できませぬな。遺留品がまったくないのも妙だ」

蜀山人は口をへの字にむすぶと、おもむろに腕を組んだ。

小雪は依然、舞っている。

池のはたに植えてある五葉松の枝にふりつもった雪が、音をたててなだれ落ちた。池の中で、錦鯉がおどろいたようにはねた。

「やはり、身もとを割出す手がかりは死美人が着ていた唐綾の衣装でありましょうな」

「ええ」

雪がうなずいた。

「あの衣装はとても高価な輸入の品でございます

わ。がらが斬新……」
と、蜀山人にねだるようにほほえみかけた。
「蜀山人先生、お友達の同心、山咲新十郎さまとおっしゃったかしら。その方におねがいして、唐綾の衣装と肌衣を拝借できるようとりはからっていただけません」
「さて」
「この吉蝶の大旦那にみたててもらいたいのです。吉蝶の大旦那は、衣装に関する日本一の目利きでしてよ」
雪が茶目っぽく瞳をうごかした。

夕刻、八丁堀同心山咲新十郎が大田蜀山人にともなわれて吉蝶にでむいてきた。
年は二十半ばか、俊秀な顔立である。無地の着流しに紋羽織、素足に雪駄という常服も当節の繊巧趣味はなく、かえってすがすがしい。
はなれ座敷の上座に端座した山咲新十郎は吉蝶の隠居源兵衛があらわれると、あいさつもそこそこに、かかえていたふろしき包みをひろげた。
「これでござる」
「ほう」
柔和な源兵衛の顔に峻厳な表情がよぎった。
「手にとらせていただいてもかまいませぬかな」
「どうぞ」
山咲新十郎が気負うように身をのりだした。
雪と蜀山人は黙ってみつめている。
源兵衛は織りの具合、手ざわり、染め具合、模様などを眼と手で丹念に吟味した。
ふむ。
源兵衛のしわに埋れた眼にかすかな当惑が生じた。しばし瞑目すると、あらためて萌黄色の長襦袢と湯文字をとりあげ、こちらのほうはすぐにすんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong